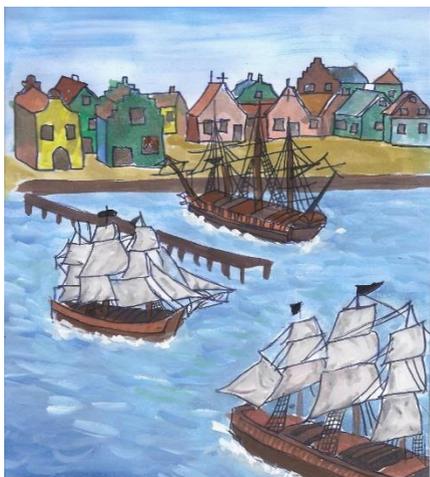


スタッフオーレンの奥方様

おくがたさま

LEVEL

4



むかし、オランダにスタフォーレンという

町まちがありました。にぎやかでとても栄さかえた

港町みなとまちでした。この町の船ふねは世界中せかいじゅうの海うみを駆け

回まわって、たくさんのお金かねを集あつめてきました。

この町まちの人ひとたちも大変たいへんなお金持かねもちになり、

ぜいたくな暮らしくをするようになりました。



スタッフオーレンの町の人たちはお金を持っている
ことが一番えらくて値打ちのあることだと思ってい
ました。

この町の中で、一番裕福なのが見栄っ張りの、

ある船主の未亡人で、夫が残したたくさん
の財産を引き継いだ奥様でした。豪華な服にきらきら光る

宝石や金の飾りをつけて、そり返って町を歩いていました。

みんなは奥様をほめたたえ、うらやましがりました。奥様はみんなにちやほやされて、
ますますいばっていました。



そんなある日、奥様はまじめで働き者で年取った船長を呼んで言いました。

「世界中を探し回って、一番美しくて値打ちのあるものを見つけてくるのよ。苦勞を惜しんではいけません。一年後の今日までに戻ってきなさい」

老船長は、しばらくの間こまって、考えこんでいました。この世の中でいったい何が一番美しく、値打ちがあるんだろうか。どうやって見つけなければいいんだろう。そして、老船長はこう、答えました。



「わかりました。奥様。世界中を回って一番美
しくて値打ちのあるものを探してまいります」

そして、次の日、老船長を乗せた船は港を
出ていきました。

この話はスタフォーレンの町のうわさになり
ました。町の人はみんな「船長はどんな珍し
い宝物を持って帰ってくるんだろう」と話して
いました。



町のひとと奥様は船がいつ帰ってくるのか、指折り数えて待っていました。

一方、船長は東や西に航海をしていろいろなものを見ました。たとえば、金や銀

のブレスレットや指輪、ダイヤモンドや

ルビーなどの宝石類。それに、美しい

刺繍の布や豪華なじゅうたん、絹の

織物、インドの象牙などです。それらは

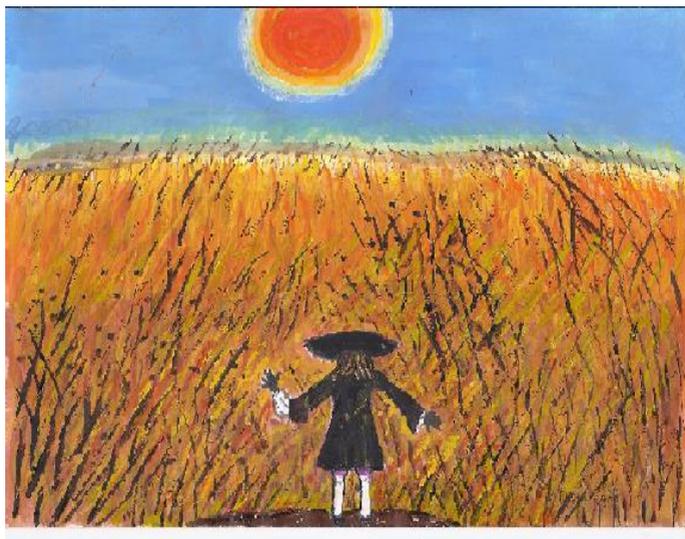
全部美しくて貴重なものでした。

でも、老船長はそれらが、世界一値打

ちのあるものだとは思いませんでした。



つきひ
月日はどんどん流れ、約束の一年が近づいて
きました。そして、船はバルト海の、ある小
さな港につきました。船長は船を降りて町を
歩き回りました。そして、町はずれまで来た
時、目の前の景色を見てハッと息をのみまし
た。そこには地平線まで一面の小麦畑があり
ました。小麦は大きく実り、波のように風に
ゆれていました。太陽の光をうけて小麦は美
しく輝いていました。



「ああ、これが世界で一番美しく値打ちがあるものだ。私たちに必要なパンは小麦で作られる。これほど、美しくて値打ちのあるものはない。」

老船長は、すぐに船に戻って小麦を買い集

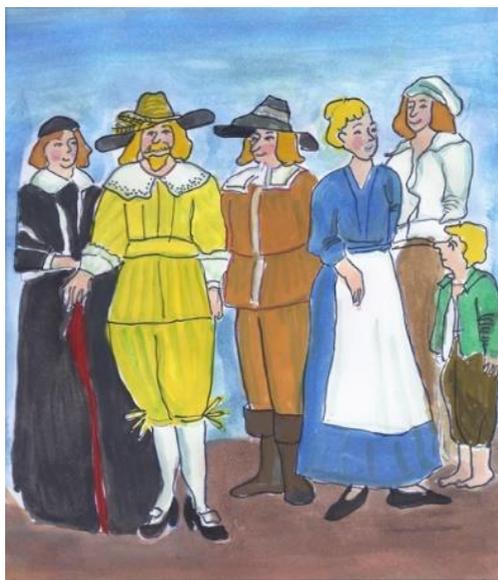
めました。そして、船にいっぱい小麦を積

んでスタフォーレンに向かいました。

約束してから そろそろ一年が過ぎよう

としていました。船が港に帰って来た時、

「船が戻ってきたぞ！」



と、スタフォーレンの人たちは叫びました。そして
船着き場に走っていきました。

奥様もきれいに着飾って船着き場に立って船を待ち
ました。しばらくして、船が着いて、老船長が降り
てきました。船長は自信と喜びに輝いた顔で奥様
の前にひざまずきました。

奥様は船長が何を持って帰ってきたのか早く知ら
れて声を震わせながら

「何を持って帰ってきたんだい」と、聞きました。



船長は、「船いっぱいの小麦です。小麦は私たちが
生きるためのパンを作るものです。これが世界で
一番美しく、値打ちのあるものです」と答えまし
た。

老船長は自分の目で見た金色に輝く小麦畑の話
をしました。ところが、奥様は真っ赤になって叫び

ました。「おまえは一年もかかって、どこにでもある小麦を買って来たっていう
の。能無しの口バ！そんなものは、海に捨ててしまいなさい」と言いました。



船長はおどろきました。「捨てるなんてとんでもない。神様のばちがあたります。小麦は私たちに一番必要なものです。この輝きの美しさがおわかりにならないんですか」

「うるさい。おまえなんか、さつさとどこかへ行ってしまいなさい。さあ、みんな、小麦を海に捨てなさい」と奥様が言ったので、船員と町の人
は、小麦を次々に海に投げ込みました。



しばらくして、船長は町を出て行ってしまいました。

その時、急に老人が奥様の前に現れて低い声で言いました。「神様の素晴らしい

贈り物を捨てると、ばちが当たります。よく考えてごらん下さい。この世にはお腹をすかした貧しい人がたくさんいるのです。あなただっという貧乏になるかわからないのですよ。気をつけなさい。」

奥様はカラカラと笑うと、指から大きな宝石のついた指輪を抜いて海に投げ込みました。

「私わたしがこの指輪ゆびわを海うみに捨てたとしても、海から指輪ゆびわが私わたしのところに戻もどってくる可能性かのうせいは絶対ぜったいにないのよ。それと同じように、私わたしが一文無いちもんなしになるなんてことも絶対ぜったいにありません」と言いいました。

ところが、しばらくして奥様おくさまがたくさんの人ひとを呼よんでパーティを開ひらいた時のことときです。召使めしつかいがもってきた大きい魚さかなのおなかに奥様おくさまがナイフをいれた時とき、奥様おくさまは「あっ！」と声こゑを上げました。



魚のおなかの中から、あの海へ投げ捨てた奥様の指輪がでてきたのです。戻ってく
るはずのない指輪が戻ってきたのです。奥様はまっ青になりました。

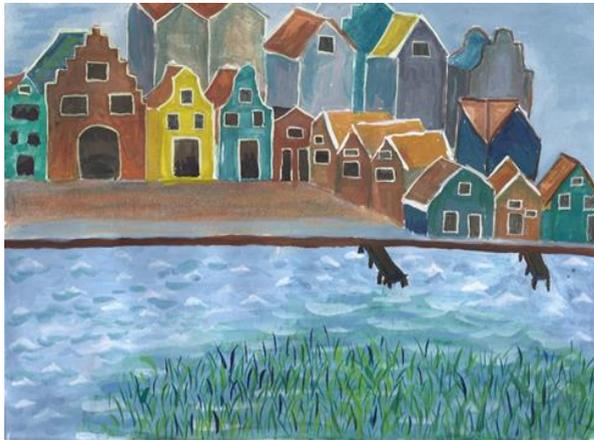
次の日、奥様の持ち船が嵐で沈没したという知らせが入りました。この後、奥様
には次々に不幸なことが起こりました。そして次の年の春、港の入り口に気味の悪
い緑色の草が生えてきました。それは小麦でした。奥様に言われて町の人たちが海
へ捨てた小麦がいつせいに芽を出したのです。

それは、ものすごい勢いで増え続けました。そして、とうとうゾイデル海の入りをふさいでしまうようになりました。もう大きな船はスタフォーレンの港に入ること
も、出ることもできなくなっていました。

スタフォーレンの町は、どんどんさびれていきました。町の人は貧しくなって、町を出ていきました。家は古くなって壊れ、死んだようになって忘れられていきました。

あの奥様も、どこかへ行ってしまった。

海の上には一面に、決して実ることがない小麦の緑の穂が浮かんでいるだけでした。



た い と る タイトル	にほんご ^{たどく} 多読の本 ^{ほん} レベル ^れ 4 ^{べる} 『スタフォーレン ^{すたふおーれん} の奥方様 ^{おくがたさま} 』 オランダ ^{おらんだ} の民話 ^{みんわ} Het vrouwtje van Stavoren から
ぶん 文	コスラ ^{こすら} 恭子 ^{きょうこ} 小関 ^{こせき} 眞稚子 ^{まちこ}
いらすと イラスト	コスラ ^{こすら} 恭子 ^{きょうこ}
はっこう 発行	オランダ ^{おらんだ} 日本語教師会 ^{にほんごきょうしかい}
せいさくび 制作日	2022 ^{ねん} 年12月5日 ^{がつ}

©オランダ日本語教師会 2022

無断転載・引用は禁止します。

